

日蓮聖人遺文に現れた波木井氏

上 田 本 昌

一

身延山を日蓮聖人に寄進した南部六郎実長（一二三二—一二九七）は、加賀美次郎遠光の子である光行を父として、聖人と同年の貞応元年に生れた。甲斐国南部に位置する波木井の郷に領主として住したので、一般に波木井実長ともいう。実長の系譜については、すでに周知の如くであるが、^{（1）}聖人在山九年間の外護をいたし、入山当初の草庵創建から、弘安四年の大坊・小坊・馬舎を有する久遠寺の堂宇建立に至るまで、丹精を尽した法功は大きく、「身延山開基檀越」として、現に毎年「円師会」が実施されている。

実長は永仁五年九月二五日、聖人滅後一六年に寂しており、従って昨年は七〇〇遠忌に当る。因って聖人の遺文に現れた実長、及びその関係者について、その一端を考察し、いささかながら報恩の意を表する次第である。

日蓮聖人の遺文において、最初に南部氏が登場してくるのは、文永六年九月のことであり、最後の書状である『波木井殿御書』に至るまでの間に、身延入山以前三書、入山以後三書の合計六書があげられる。即ち

(1) 六郎恒長御消息 文永六年九月

(2) 南部六郎殿御書 文永八年五月十六日

日蓮聖人遺文に現れた波木井氏（上田）

日蓮聖人遺文に現れた波木井氏（上田）

(3) 波木井三郎殿御返事 文永一〇年八月三日

(4) 地引御書 弘安四年十一月二十五日

(5) 波木井殿御報 弘安五年九月一九日

(6) 波木井殿御書 弘安五年一〇月七日

右六書を通して、聖人と実長の関係を中心に考察を進めていきたい。

一一

先ず(1)の『六郎恒長御消息』であるが、文永六年九月、聖人四八歳の時の書であるとされている。真蹟は伝わっていないが本満寺本の写本があり、『縮冊遺文』では文永元年の作とみなしている。しかし、その後の研究で『昭定遺文』では文永六年説を採るに至っている。「恒長」という書名についても、本文に「南部六郎恒長殿²」となっているところからきたものであるが、これについても宮崎英修教授の指摘によると「写誤による誤伝であろう」としている。さらに身延の『日朝本録外』や、『他受用御書』及び『三宝寺本』等には、いずれも収録されていないことなどからすると、無条件で聖人の遺文であると断定することには、いささか考慮を要するとする見方もされている。³

『本満寺本』一三巻には『念仏無間地獄事』という書名で収録されており、南部六郎実長が、当時流行していた念仏信仰を持っていたので、これを批判し法華信仰に帰すべきことを教示された一書であるといえる。

先ず「所詮念仏無間地獄云義有¹」と述べて、二義の第一は法然上人の『選択集』をあげ、浄土三部経以外の仏一代の聖教すべてを捨閉闍¹抛せよというが、その阿弥陀仏は四十八願を立てており、衆生救済を標榜しているが、た

だし「唯除、五逆、誹謗正法」といっている。したがって正法たる法華經を始めとする聖教を誹謗したことにより、法然上人自身もまたこの阿弥陀仏の本願から漏れた人となり、その弟子や檀那らも同時に無間地獄へ墮して救われぬ者となるというのである。

第二は法華經の序分である無量義經に「以方便力、四十年未顯真実」とあり、浄土の三部經は四十余年の中の教經であり、「南無妙法蓮華經を真実と申」として、法華經に移って題目を唱えるべきことを教示している。最後に日本国の民はすべて「教主釈尊の御子也。三千餘社の大小の神祇も釈尊の御子也。全非阿弥陀仏子也」として、此土は悉く教主釈尊の本領であり御子であることを明確にしている。要するに念仏から法華經へ移るべきことを説いた一書であり、実長の信仰を改めさせるための教示であったと考えられる。

これによってわかる如く、実長及びその一門は、念仏信仰の徒であったのが、聖人によって法華の信仰へと改宗していったものと考えられよう。この点については実長の長男である実継が、最初、聖人の門下である日興の手引きで入信し、実長は日興・実継の紹介で聖人に帰依していったものとの説があり、その入信が文永六年、即ち本書述作の頃と考えられている。尚、実長の家系は本来、真言宗であったともいわれている。

何れにしても実長は、この頃、念仏信仰から日興や実継といった人々を介して聖人を知り、法華信仰に入信していったことは間違いないものと考えられよう。

三

次に、②の『南部六郎殿御書』であるが、これは文永八年五月十六日の述作で、真蹟は伝わっていないが『延山録

外』の写本がある。龍口法難の生起する約四か月程前なので、鎌倉での作と考えられる。「眠れる師子に手不^レ付^レ不^レ噴、流にさを立^テざれば不^レ浪立^二、不^レ阿^三噴^一、謗法^ヲ留難^{ナシ}」という語で始まるこの御書は、正法を誹謗する者を呵噴しなければ、今生は事なくとも後生は無間地獄に墮ることは疑いがないものであることを強調している。

即ち、「凡^レ謗法^ノ内外^ノ」とし、「外者日本^ニ六十六ヶ国^ノ謗法^ハ是也。内者王城九重^ノ謗法^ハ是也。」とし、内外にわたっての謗法により、その国は亡び万民は数を減じ、善神捨国があげられている。この頃は聖人も折伏逆化の最も盛んな時期に当たっていたので、しきりに謗法について語られているのは当然のことであつたとも考えられるが、実長については前書と同様に、正法を誹謗する者に親近すれば、從來修してきた善根は悉く消滅して、墮地獄の相を現ずることになると教示している。こうした点から考えると、実長は前述の如く阿弥陀信仰であり、念仏宗の人々と親交も深かつたことから、こうした趣旨の内容をもった御書となつていたのであろうことが推察されてくる。したがって正法の正師に親近すべきであることを実長に強調している。謗法を禁制しない場合は、「必^ク国家^ヲべし」であり、讃教の勤めがあれば「七難必退散^セ矣。」とし、最後に「故^ニ分^ニ内外^ノ有^レべし。」と結んでいる。この「分^ニ内外^ノ」は、大きくは国家を指すが、範圍を限定すると一郷一邑を指すとも考えられる。実長の一郷にあって謗法を呵噴すると同時に、正法の入師に親近することの大事を明らかにしている。

次に、龍口法難を経たのち、佐渡一谷に於て著作された③の『波木井三郎殿御返事』は、文永十年八月三日付であり、宛名は「甲斐国南部六郎三郎殿御返事」となっている。真蹟は伝わっていないが、日興の写本が重須の本門寺にある。これは実長が法門について疑問点をあげ、解答を求めてきた返書である。即ち、「法華經を信仰することは当世の人々にとって難儀なことである。その理由は仏法を修行するのは現世安穩後生善處のためである。しかるに聖人

は法華經の行者と称しながらも、留難多く流罪にまで処せられている。これは仏意に反しているからではないか。」という質問である。この種の疑問は実長のみではなく、当時の人々の共通した考えであり、門下の中にも迫害多難の聖人をみて脱落していく者も少なくなかった。特に佐渡流罪の前の龍口法難の際には、相当数の退転者が出ているのである。ましてや入信してから間もなく大法難にあうのを眼前にした実長にしてみると、無理からぬ疑問であり、佐渡までわざわざ書を送って疑問の解答を得ようとしたのである。素直に質問を寄せるだけ実長は自分の信仰に対して、深い関心を持っていた現れともいえよう。

実は門下のこうした疑問に対し、聖人はすでに前年二月に『開目抄』を著作し、法華經はもちろん他の經文を引いて、この疑問に答え、勸持品二十行の偈文を色読することにより、真に法華經行者としての使命が果せるのであることを教示している。その内容についての詳細はここでは省略するが、その上で注目すべきことは、

「但日蓮法師に度々聞^{キタル}之人々猶値^ナ此大難^ニ之後捨^ル之歟。貴辺者聞^レ之一兩度一時二時歟。雖^リ然未^ダ捨^テ信心之由聞^レ之。偏非^ニ今生事^ニ。」

とみえて、このあと妙樂大師や法華經・涅槃經等の諸文を引いて、実長の法華信仰を捨てずに持続していることの重要性を強調している。立教以来、聖人に随順してきた門下の中でも離脱する者が多い中において、苦境の底に立たされた聖人から離れることなく、しかも真摯に法門について問いを發する実長の態度は、聖人にとってはまさに現世のことだけでなく法師品所説の「化人^〇」として受けとめられたものと考えられよう。

「而貴辺武士家仁^ニ昼夜殺生惡人也。不^レ捨^テ家至^ニ此所以^ニ何術^ナ可^キ脱^ル三惡道^ニ乎。能^ク々可^キ有^ル私案歟。法華經乃心^ニ当位即妙不改本位申^ト不^レ捨^テ罪業^ヲ成^{スル}仏道^ニ也。」

この一文は武家にある実長の成仏得脱は法華經以外にないことを示したものであるが、この点について「能々可有私案」ことを説くものである。尚、最後にもっと詳しく述べるべきであるが、「大体教之弟子有之。召此輩等粗聞」とし、更に端書をもって

「鎌倉筑後房。弁阿闍梨・大進阿闍梨・申小僧等有之。召之可有御尊。可有御談義・大事・法門等粗申。彼等曰本末・流布・大法少々有之。隨御學問可注申也」

と述べている。聖人が鎌倉におられたなら当然面授口決であつたろうが、佐渡におられたので、鎌倉に残してきた日朗、日昭及び大進阿闍梨といった主要な弟子を召して、代りに詳しく聴聞すべきことを伝えている。

こうした御書の上から推察するに、実長は聖人が身延へ入山される以前、鎌倉・佐渡時代から、昭・朗・興といった主な弟子との交渉も、何らかの形であつたものと考えられてくる。武人実長が罪障消滅のため、聖人はもとより、その主たる門弟についても法門の大事を質し、信仰を深めていったであらうことが推察されてくる。

四

第四書目は『地引御書』で、弘安四年十一月二十五日付であり、真蹟は五紙完で身延山に曽存していた。周知の如く入山当時創建された草庵が、すっかり老朽化し、一時修復したものの入山八年にして、いよいよ大改修を要することとなり、この年に至って西谷に新しく大坊・小坊・馬舎を持つ伽藍の必要を生ずるに至つたのであつた。

実長に対する書簡は前書の『波木井三郎殿御返事』以来のことであり、八年振りのことである。この間、全く書信が交わされていなかったことに對する疑義も考えられないわけではないが、一つには西谷と波木井という極めて近い

山中に居住していたので、時により折りにふれて、互いに接する機会も多かったことと考えられる。面接の機会が多ければわざわざ書信を交わす必用もないわけである。面授口決の教化が当然ながら考えられてくる。この間の書信がないことから、或いは実長に聖人粗略の義があったのではないか、とする疑いを生ずる向きもあるようであるが、我が所領へ聖人の入山を認め、草庵建立を許したことなどを考慮し、さらに後述の『波木井殿御報』の内容からみたと、その義のなかったことが推察される。

さて、『地引御書』によると、「坊は十間四面に、またひさしきしてつくりあげ^u」ており、「地ひき、山づくり」をして、先ず西谷の山地を整備して土ならしを行い、従来の草庵よりも土地建物共に拡張したものとなっていることがわかる。「十一月ついたちの日、せうぼう（小坊）つくり、馬やつくる。八日大坊のはしら（柱）だて、九日十日ふき（葺）候了^x。」とあるので、建造物の順序や日数も判明する。かくして次に、

「次郎殿等の御きうだち（公達）、をや（親）のをほせと申、我心にいれてをはします事なれば、われと地をひき、はしら（柱）をたて、とうひやうえ（藤兵衛）・むま（右馬）の入道・三郎兵衛尉等已下の人々、一人もそらく（疎略）のぎ（義）なし。坊はかまくらにては一千貫にても大事とこそ申候^g」

とみえる。この一文からみても実長の一族がいかに聖人を外護していたかが窺えるといえよう。「次郎殿等」というのは、実長の長男及び兄弟衆を指している。長男は清長・次郎・六郎次郎とも称し、親の命に従って、自らも聖人に帰依していたので「心にいれて」手の者を引き連れ、自らも建築に奉仕していたことがわかる。藤兵衛、右馬の入道、三郎兵衛尉もそれぞれ実長の一族の者とみなされているので、実長は一族の中から長男を始め主要な人物を西谷へ差し向けて、大坊・小坊・馬舎の建築に、総力をあげて取り組んでいたと考えられる。「一人も疎略の義なし。」の文が

此の間の様子を充分に語っているといえよう。しかもこの建造物は当時、鎌倉では「一千貫」もの値打ちがあるというのであるから、草庵の時のような「仮りの住居」ではなく、本格的な建築であったことも知りうる。実長父子の篤志によって完成した堂宇は、また落慶式の諸行事も盛大に挙行されているのである。

即ち、「二十四日に大師講^ニ並^ニ延年、心のごとくつかまつりて、二十四日の戌亥の時、御所にすゑ（集会）して、三十餘人をもつて一日経かき（書）まいらせ、並^ニ申^ニ酉の刻に御供養すこしも事ゆへなし。」とある如く、天台大師講・清興延年の舞い・法華写経会・供養法要等が連続して催され、身延山開闢以来初めての人出で賑わった。「人のまいる事、洛中かまくらのまち（町）の申酉の時のごとし。さだめて子細あるべきか。」とみえる如くであり、この記念すべき行事は、身延山の聖人にとっても、又実長の一族にとっても最大の特筆すべきものとなったのである。恐らく本弟子はもちろん数多くの弟子や、甲・駿両国から始まって遠方の主要な檀越に至るまで、門下の関係者が、大挙して祝賀を表し、落慶行事に参加したものと考えられる。とりわけ実長の一門は、施主としてできる限りの人々が参列したのであることが推察しうる。

ただ疑問な点は、これだけの一大行事に対して、実長自身は参列していなかったことである。武士であり又領主という立場もあって、やむをえない事情から遠方の地へ出張していたものと考えられる。それはこの御書の文面からみても容易に判断できる。即ち、実長が参加していなかったので、当日の模様はもちろん十一月一日からの上棟式や造宮の手順などを、詳細に知らせしており、尚且つ山の天候に至るまで記述しているのである。もしも実長が波木井に在住していたとしたら、当然のことながら落慶式に列席していたであろうし、天候のことも改めて記すまでもなく、先刻承知しているはずである。「七日は大雨、八日九日十日はくもりて、しかもあたたかなる事、春の終^リのごとし。十

一日より十四日までは大雨ふり、大雪^{ゆき}下^{くだ}て、今に里にきへず。」と山や里の雪の状況まで知らせているということは、書信の相手が山や里の様子を知らなかったからである。つまり実長は身延山・波木井の里から遠い地方、例えば鎌倉等へ他出していたものと考えられる。落慶式の当日はもちろん、少なくとも十一月一日以前から、不在であったことになる。尚、実長は「御祈念」の筋があり、その成就を願っていた。その念願が叶った際には「二人よりあひまいらせて、供養しはてまいらせ候はん。」とあるので、聖人はその折りには実長と二人で又供養をなしとげようと考えておられたことがわかる。「事々又々申^まべく候。」という言葉で結んでいるが、これは短文ながらも重要な意味をもっているといえる。詳しいことは、またまた申すというのであるから、(一)実長とは近い中に又会うことを予想していること。(二)「又々申す」というので、従来も折りにふれてたびたび会っていたことの二点が考えられてくる。現在、御書は残されていないが、こうした文書の一端からも、聖人と実長との身延における交流が、距離的にも極めて近い間柄にあったことから、幾度となくあったものと推察できよう。たまたま落慶法要には、上記の如き事情で、やむなく欠席せざるをえなかったものと考えられる。

五

かくして最後の御書である(5)の『波木井殿御報』であるが、これは既に明らかな如く、聖人が九年間住み馴れた身延山を出発して、弘安五年(一二八二)九月十九日に武蔵国池上宗仲の館に到着された折り、実長に宛てた御書であり、自ら筆をとることが困難な程に衰弱していたので、日興に代筆させたもので、原本は曾て身延に存していたものである。

したがって直筆ではないが、聖人の意を伝えたものとして、古来真蹟同様にみられている。内容は身延から無事に池上まで着いたことを先ず述べ、道中の山河を越えての旅が、困難なものであったにもかかわらず、「きうだち（公達）にす（守）護せられまいらせ候て、難もなくこれまでつきて候事、をそれ入候ながら悦存候」とみえる。身延下山に当り実長は「くりかけの御馬」と、身内の主な者と家来を付けて、道中の安全・警護を命じていたことがわかる。「公達」とは先の『地引御書』における「御公達」と同様であると考えられる。前書の際は次郎殿等・藤兵衛・右馬の入道・三郎兵衛尉といった名があげられていたが、今回は実長の直接指令によるものであり、承知の上なので個人名は省略されている。恐らくはこれ等の公達であったことが推察される。当時してみると道中を無事に送り届けるということは、現代と違って相当な労力と費用を要したことであり、実長の聖人に対する志の深いものがあつた現れともいえよう。

また「くりかけの御馬」が相当に乗り心地もよく、「あまりにもをもしろくをばへ候程に」いつまでも側へおいておきたく、知らぬ舍人ではおぼつかないので、常陸の湯から帰って来るまで付けておきたい旨が記されている。筆もとりにくい病弱の身で、馬の上に心を使っている聖人の人柄が如実に現れた一文でもある。

「さてはやがてかへりまいり候はんずる道にて候へども、所らう（労）のみ（身）にて候へば、不ぢやう（定）なる事も候はんずらん。」

常陸の湯へ行くことにより、病状の回復をまって再び帰山する予定であつたことがわかると同時に、病身であるのでこの予定は不定であることも覚悟されていたことが明らかであつた。恐らく聖人の心中においては、此の道を生きて戻ることが可能か否かは悟られていたものと推察できよう。というのはこの文のすぐ後に、

「さりながらも日本国にそこばくもてあつかうて候みを、九年まで御きえ候ぬる御心ざし申ばかりなく候へば、いづくにて死候とも、はか（墓）をばみのぶさわ（沢）にせさせ候べく候。」

と続いているのである。これはまさに「遺言」としての意味を持ったものであり、いつわらざる心情を吐露されたものといえよう。在山九年間の帰依・丹精について、「御心ざし申すばかりなく候」との一語には、聖人の実長に対する感謝の情がこめられており、実長が聖人に対して帰依の念の篤いものであったことを物語っているといえよう。

前述の如く、身延山の寄進から始まって、草庵の建立やさらに大坊・小坊・馬舎をもつ久遠寺の創建に至るまで、実長一族の聖人に対する帰依の念は、まことに篤いものであったことの現れであったといえる。だからこそ、たとえどこで命が終るようなことになっても、「墓をば身延の澤へ」と遺言されるにまで至っているといえよう。万一実長に聖人を疎略にする義が少しでもあったとしたら、墓を身延の地へ建立してほしいなどということはいわなかったことであろう。

聖人してみると身延山は、入山の当初より一見して「心中に叶て」いた處であり、「仏、菩薩、諸天善神の棲み給う功德聚のみぎり」であったのである。「法華經行者」の住所なるが故に、「靈山淨土」であるとし、昼夜に釈迦仏・法華經と共に生活された最も尊い重要な場所であったのである。だからこそ生きている時はもちろん滅後も墓を身延に建立し、未来永遠に身延に棲むことを決定されておられたのであった。

これはひとえに聖人が実長を信頼していたからであり、また外護・丹精に感謝すると同時に、これから（滅後を含めて）後事を托するに足る人物として、重きを置いていたからいえたものと推察しうる。聖人してみると、生涯をしめくくった地として、身延は他の如何なる地よりも重要であり、最勝の地として何ものにも代えがたい所であ

り、まさに靈山淨土そのものとして受容されたといえよう。

六

実長に与えられた一連の御書並びにその他の御書からすると、前述の如く身延靈山の考え方が出てくるのであるが、こうした御書のある反面、また逆に身延の自然の厳しさや、不便な山中のこととて、地獄の様相を呈していたことを記された御書もあり、これらをもとにして前述の如く実長に疎略の儀があったのではないかと疑問視する向きもある。たしかにそうした御書も一方には見られるのであり、何故に聖人は身延でこのような不遇な時をすごさなければならなかったのか、実長は外護をおこたったのではないか、との疑いが生じてくる場合も考えられる。例えば弘安元年九月六日に妙法比丘尼から衣が届けられたが、その礼状には、

「訪人なければ命もつぎがたし。はだへをかくす衣も候はざりつるに、かかる衣ををくらせ給こそ、いかにとも申ばかりなく候へ。見し人聞し人だにもあはれとも申さず。年比なれし弟子、つかへし下人だにも、皆にげ失とぶらはざるに、聞もせず、見もせぬ人の御志哀なり。」

とみえる。この文面からすると、西谷の聖人は全くの孤独な清貧に甘じ、実長のみでなく、弟子達にもみな見離されて時に衣・食・住にもこと欠くような生活状態であり、命を保つことも困難なように感じられる。しかし、これはまた施主に対する感謝の気持ちをも最大限に表すための表現とも考えられよう。また弘安三年正月に筒御器一具等を送り届けてきた秋元太郎兵衛へ発せられた御返事によると、

「木の皮をはぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折て身を養ひ、秋は果を拾て命を支へ候つる程に、

(乃至) 本より人も来らぬ上、雪深^しして道塞がり、問^と人もなき處なれば、現在に八寒地獄の業を身につぐのへり。生^なながら仏には成^ずして、又寒苦鳥と申^ま鳥にも相似^{おそ}たり」

とみえる。ここでも地獄のような自然環境の中で、最低限の日常であつたことがわかる。冬季の降雪量も多いシーズンにあつては、西谷を訪問する人もなく、陸の孤島のような状況下におかれていたことになる。

こうした諸文からすると、実長の一族は果して聖人に対し、どの程度の帰依であつたのであろうか、という疑問も生じてくるのは否めないことである。この点については、また後でふれるが、現代と異り当時の西谷草庵のあつた近辺へは、道程も相当に厳しいものがあり、道路条件は今とは比較できない程に嶮難惡路であつたので、雪道ともなると一層のこと、出入りには難渋^ししたことが推察される。

本来、聖人は衣・食・住の安定を求めて入山されたわけではない。この点は入山の聖意を考えると容易にわかることである。⁴⁷⁾ もしも衣・食・住を得るためのみならば、鎌倉に在住していた方が、多くの弟子や檀越に囲まれて、交通の便もよく、山中より遥かに良好な生活が送れたはずである。いくつかある入山の理由の一つに、山林に交わつて心しずかに受持・読・誦・解説・書写の五種修行に励まれること、さらには無始以来の罪障を消滅させ、三業の惡を転じて三徳を成ずるためのものであつた。⁴⁸⁾

また聖人は身延山の生活環境に限らず、一つの現象をいくつかの面からみて、時に正反対と考えるような受けとめ方をされている面が見られるのである。例えば正嘉元年の大地震について、これを吉瑞であるとみなしている場合と、逆に凶相であるとする見方とに分れている。吉瑞の場合は末法にいいよ正法たる妙法の五字七字が流布する前兆であるとし、また仏使上行の出現の瑞相であると見ている。凶相とする見方では、邪法の流布により善神捨国し、亡国

となる前ぶれであり、また末法の正師たる「法華經の行者」に迫害を加えるために現れた凶相であるとする見方があ
る。これらの点については、すでに考察を終えているので、爰では省略することにするが、これと同様に身延山の環
境についても、同一自然を浄土とみたり、また地獄とみなして罪障消滅の信行を重ねていることを説いているのであ
る。

浄土といい穢土とみなすのも、「土に二つの隔てなし」という立場から、表裏一体の受けとめ方をされ、「時」に
じ「機」に従って、「隨宜所説」されていかれたものとみなすこともできよう。したがって身延の状況についても、
靈山浄土として「仏菩薩の住給、功德聚之砌也」という仏国土としての見方をされている場合もあるが、前記の如く
八寒地獄の様相とみて、懺悔滅罪の道場であるとみなしている場合もあるのである。一見矛盾した見方であるとも感
じられるが、聖人してみると、双方の立場を兼ね備えもった重層性のある見解に立たれていたのであった。

つまり仏使上行の自覺に立たれ、三仏と昼夜俱に在るという法悦にひたっておられる時は、靈山浄土であると見ら
れ、また一方無始の罪障を消滅するための修行の場と見て、謗法を償うための苦難を受けているという受けとめ方を
し、地獄の苦を味わうものとして「大ばば地獄にことならず」と記されている場合もある。「三業の惡転じて三徳を
成ぜん」ために「昼夜に法華經をよみ」という読誦行に専念し、「著されば風身にしみ、食されば命持がたし。燈に
油をつがず、（乃至）命いかでかつぐべきやらん。」という苦難を修行されるに至ったのである。

即ち身延山は靈山浄土であると同時に、無始の罪障を消滅するための道場であり、時に地獄の如き苦難をのりこえ
ていかなくはならない修行の場所でもあったことになる。こうした純粹に宗教的な体験を繰り返された聖人は、そ
の時々に応じて筆をとられ、或る時は仏・菩薩の棲み給う宝土として表現し、又或る時は苦修練行の道場として、獄

土の如き幽窟であると記されているのである。一世の聖者ともなれば、こうした重層性を持った心境になることも充分考慮できることといえよう。

七

次にもう一つ考えられることは、既に明らかな如く、実長は年間を通じて、いつも波木井郷に常住していたわけではないという点があげられる。弘安四年の秋、西谷の大坊・小坊・馬舎が完成した時も同様であるが、領主とはいえ鎌倉方面へ、機会ある毎に出張し、幕府との連絡や情報の収集等に、常に気を配っていたものと考えられる。

聖人が身延へ入山されてからも、鎌倉へは年間を通じ、時には長期間の滞在もあったであろうし、又領地内の見廻りのために波木井を離れることも、決して少なくなかったことと推察されよう。したがって常時波木井郷に在って、西谷の聖人といつも交渉があったわけではない。疎略の義は毛頭なかったとしても、領主という行政官の立場から當時の状況を察するに、領内を安堵せしめるため、政情不安定な幕府や近隣の地頭・領主らとの交渉などもあり、東奔西走の日々も続いていたことが推察される。思わぬことから西谷を尋ねる機会も容易にいかぬまま、月日を経過させることもあったであろう。これをもって直に実長の行動を疑問視することは、いささか酷であり戦乱絶間ない時代の領主という立場を理解しえないものといえよう。

この故に実長へ宛てた最後の御書となった『波木井殿御報』には、前述の如く「いづくにて死候とも、はか（墓）をばみのぶさわ（澤）にせさせ候べく候おこ」と記されている。在山九年間の帰依に対する感謝の心情が率直に述べられているのである。

前述の如くもしも実長に多少なりとも疎略の情があったとしたら、「御心ざし申ばかりなく候」という表現はなかったものと考えられるし、また身延を地獄であるとのみ本心から感じておられたとしたら、「いづくにて死候とも、墓をばみのぶの澤に」とはいわなかったものといえよう。これはやはり心底深く靈山淨土として感受されていたからであるといえる。池上へ到着されたことを悦ぶと同時に、やがてまた身延へ帰ることについても記されているが、これは身延をこの上なく尊い山とし「仏菩薩の住給功德聚之砌也」と確信されていたからで、「娑婆即寂光」の本土であるとされていた現れであると考えられる。故にまた身延へ参詣することにより、「無始の罪障も定て今生一世に消滅すべきか」という受けとめ方につながるのであって、前記の如く罪障消滅のための地獄の苦難も、身延における今生一世の信行により、消滅することができて即身成仏をとげることができるとするのである。

かくしてこの最後の実長宛の御報は、身延山を寄進されたことから始まり、草庵の建立や大坊・小坊・馬舎を備えた久遠寺の造営、さらに池上へ向うに当っての外護丹精の数々に対して、在山中の御礼を述べたもので、聖人の真意が伝えられたものといえよう。在山の九年を無事すごすことができたのは、なんといっても実長の法功に依るところ大なるものがあつたからであるといえる。

尚、同年十月七日に「波木井殿其外人々」宛に書されたと伝えられる(6)の『波木井殿御書』があるが、この御書は古来真偽説があり、後人によって諸鈔を抜萃したものではないか⁽⁷⁾とも考えられている。誕生からの一代を述べ池上到着までの概要が記されていて、「墓をば身延山に立させ給へ⁽⁸⁾」と先の『波木井殿御報』と共通する一文もみられる。また実長のことを「しらずや、此人は無辺行菩薩の再誕にてや御座すらむ。」ともみえる。在山九年間の好意に対する謝辞をこめたものといえる。「日蓮は日本十六箇国島」の内に、五尺に足ざる身を一ツ置處なく候しが、波木井

殿の御育^{はぐ}みにて九箇年の間、身延山にして心安く法華經を読誦し奉り候つる志をば、いつの世にかは思^{おも}忘^{わす}候べき。」とあるが、これも先の『御報』と共通する所もみられるのであって、たとえ真偽未決とはいえ、実長に対する聖人の心情は相当に篤いものであったことが伝わってくるといえる。

このようにみてくると、聖人と実長との間は、同年の誼の上に信仰を通して深く交わりを持ち、外護丹精は決して他の檀越と比較しても遜色をもつものではないと考えられてくる。実長の家系は前述の如く本来真言宗であり、実長自身は念仏信仰を持っていたのが、日興によって聖人を知り、実継らを通して改宗し、聖人に帰依していったことから考へるとき、当時の主要な檀越は、ほとんどが聖人によって改宗してきた者が多く、実長もその一人ということになるものの、とりわけ実長は聖人の晩年に、「安住の地」を与えて、ともかくも九年間の最も重要な時期を、聖人に読誦唱題・解説書写の機会をつくり上げた法功は、高く評価されて然るべきものといえよう。聖人最後の御書である(5)の『波木井殿御報』と、(4)の『地引御書』の二書からだけでも、そのことが理解されるのである。

〔註〕

- (1) 宮崎英修教授の『波木井南部氏事跡考』に詳説されている。また中里悠光師は「南部実長考―実長の姓について―」(『棲神』第五三号一五三頁)で論究している。
- (2) 六郎恒長御消息 定遺 四四二頁
- (3) 『日蓮聖人遺文辞典』 二二七頁
- (4) 同 九〇五頁
- (5) 南部六郎殿御書 定遺 四八七頁
- (6) 「かまくらにも御勘気の時、千が九百九十九人は墮^{オチ}候人々」(新尼御前御返事・定遺八六九頁)とみえる。

日蓮聖人遺文に現れた波木井氏(上田)

日蓮聖人遺文に現れた波木井氏（上田）

- (7) 波木井三郎殿御返事 定遺 七四八頁
- (8) 拙論「法華經に現れた法師と化人」(『棲神』第六二号参照)
- (9) 波木井三郎殿御返事 定遺 七四九頁
- (10) 同 同 七四五頁
- (11) 地引御書 同 一八九四頁
- (12) 同 同 一八九五頁
- (13) 波木井殿御報 同 一九二四頁
- (14) 拙論「日蓮聖人における仏国土思想の展開」(『日蓮教学の諸問題』一七一頁を参照されたい。)
- (15) 妙法比丘尼御返事 定遺 一五六四頁
- (16) 秋元御書 同 一七三九～四〇頁
- (17) 拙論「日蓮聖人身延入山の研究」(『日蓮教団の諸問題』参照)
- (18) 南條兵衛七郎殿御返事 定遺 一八八四頁
- (19) 拙論「日蓮聖人の天災観」(『大崎学報』第一〇三号を参照されたい。)
- (20) 一生成仏鈔 定遺 四三頁
- (21) 四條金吾殿御返事 同 一八〇一頁
- (22) 兵衛志殿御返事 定遺 一六〇六頁
- (23) 南條兵衛七郎殿御返事 同 一八八四頁
- (24) 松野殿女房御返事 同 一六五一頁
- (25) 波木井殿御報 同 一九二四頁
- (26) 四條金吾殿御返事 同 一八〇一頁
- (27) 『日蓮聖人御遺文辞典』 九〇七頁
- (28) 波木井殿御書 定遺 一九三二頁